

ルーマニア王妃が遺した名作

富士 眞奈美



『わしといたずらキルディーン』
マリー女王著 長井那智子訳
定価1890円 春風社



『許されざる者(上・下)』
辻原 登著
定価1785円 毎日新聞社

この書は60年以上前に、フロイトを日本に初めて紹介した精神分析医・大槻憲二氏により『わし姫物語』として翻訳出版された。幼少の頃、この本を読み深い印象を受けた宮内庁皇室医務主管の金澤一郎氏が、とくに絶版となっていたものを国際子ども図書館でみつけ、ぜひ復刻を、と相談したのが故大槻氏の孫娘・長井那智子さんである。イギリス経験が長く、英文学に詳しい長井さんの訳はとも品がよく美しく丁寧で、読みやすい。大人も充分楽しめる、子供にはもちろん学ぶことの多い一冊である。総ルビが振ってある。

なにしろ、原作者が本物の女王だ。19

世紀末にルーマニア王家に嫁いだマリー女王。生まれはイギリス王室・ヴィクトリア女王の孫である。初恋の人・のちのジョージ五世とは結ばれず、泣く泣く當時は下田舎だったルーマニアに18歳で嫁いでゆく。やがては三男三女の母となるのだが、たぶん、現状を認識してゆくプロセスは『わしといたずらキルディーン』に充分活かされていることだろう(かのドラキュラ伯の居城が女王のお気に入り別荘だったという環境なのだから)。遠い昔の話、美しい宮殿に棲む王様と女王様は豊かで幸せな国を治めていたのだが、ただひとつの望みは「赤ちゃん」。お忙しかった神さまはやっとおふたりの

ことを思い出し、王さまの髪がまっ白、女王様の髪にも銀色のものが混るころ、女の赤ちゃんをお授けになった。国じゅうが喜びに湧き返る。女王はキルディーンと名付けられ、国王夫妻始め宮廷の人々に溺愛される。女王はどんどん我儘になり、じぶんの思い通りになるまで大暴れする子になる。女王はとても優しく王女をしかることが出来なかった。「もしきちんとしかることができたならこのお話は書かれなかったでしょう」

野放図で怒った猫のように野蛮で乱暴な女王の眼。父王の大事な王冠を隠すといういたずらに王様夫妻も覚悟を決める。星占い師の暗示によって国の外れにある古い塔に王女を幽閉し、大わし達に養育を任せることになった。7歳の女王が飢餓や孤独を経験し、厳しいわしの教えにより他人を思いやる優しい心、感謝、礼儀を身につけ、善悪、明暗など相対するものの中で「生きてゆくこと」を認識し父母の待つ城へ帰ってゆく。このくだりは読んでものお楽しみ。手刷り版画は当時の挿絵画家・ジヨブによるもの。細密で美しい絵は素晴らしい。拡大鏡で見入ってしまう。

というところで待ちに待った辻原登著『許されざる者』上下巻を手。大逆事件に連座したとされ刑死した新宮(森宮)の医師・大石誠之助がドクトル横となつて物語に甦る。

毎日新聞に計582回連載され今年2月末完結した華麗でダイナミックな長編小説。新聞小説を楽しみに毎日朝刊を待つなんて、本当に久しぶりであった。舞台は作者・辻原さんの故郷・和歌山の新宮市を思わせる架空の町、森宮。日露戦争の時代、紀伊半島の一地方に、こんな魅力的な人物が生き生きと自由を求め個性的な日常を送るなんてことが本当にあったのかしら、と思いつつ、辻原ワールドにぐいぐい溺れ込んでしまう。主要人物は美しく潔く品がよい。ドクトル横はチェーホフの如く。その恋愛も匂い立つように優雅で知的、物語として完璧なのである。あぁ、早く読みたいー。(女優)

(女優)